

特別養護老人ホーム ふしの白寿苑

1 基本方針

- (1) 入居者の尊厳を守り、安心して楽しく生活できる環境とサービスの提供に努めます。
- (2) 職員の人材育成に努め、よりよいサービスが提供出来るよう努めます。
- (3) 共生社会の一翼を担う地域福祉の推進と、信頼される施設作りを目指します。

2 利用者の状況（令和3年3月31日現在）

(1) 入退所の状況

定員	前年度末 利用者数	令和2年度中の入退所状況					利 用 延人員	年間平均 稼働率	年 度 末 利用者数	
		入所	退所	退所理由別						
				施設 移管	契約解除 (入院等)	死亡				
70人	70人	14人	14人	0人	5人	9人	24,504人	95.91%	70人	
元年度	70人	70人	11人	11人	0人	4人	7人	24,773人	96.69%	70人

(2) 利用者の介護度別人員

性別	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	計
男 性	0人	0人	4人	4人	8人	16人
女 性	0人	0人	5人	24人	25人	54人
計	0人	0人	9人	28人	33人	70人

(平均介護度4.34)

3 事業の実施状況

(1) ユニット型施設の安定経営

ア 各ユニットで、コロナ禍の生活環境を整備しながら、多職種と情報共有や連携をとりつつ安心、安全なサービス提供と安定した施設経営に努めた。

離職者は年度末に理事長発令（介護3、厨房1）4名。そのほか、施設長発令の介護と厨房パートの離職、産・育休者4名や病休者もあったが、事務局や社協の人材バンク等の協力で年間を通じ人材を確保でき、ほぼ欠員なく運営できた。

人材育成は、OJTとともに、オンライン等を利用した各種研修受講でスキルを磨いた。

イ 理念に基づくユニット支援と介護の提供が出来るよう、ユニットケア委員会の主催で年4回ミニ研修を実施した。

ウ 入居者の日々の健康管理とともに苑全体でコロナ等感染症予防に努めた。特に発症時想定感染症拡大予防初動マニュアルの整備や訓練、備蓄品の準備など実施した。介護事故等は、骨折や誤薬など検証と再発防止に努めた。また、安定経営の為、空床利用や新規利用者の迅速な利用に努め、早めの面接を行ったが、長期入院等で、年間平均稼働率は入所95.9%（目標96%）、短期94.5%（目標90%）だった。

エ 毎月の代表者・ユニット会議で利用稼働率や、光熱水費、おむつ代、ゴミ回収量などの状況や推移を職員間で情報共有し、経費削減と業務見直しに努めた。また、年次有給休暇5日以上取得とリフレッシュ休暇の取得、時間外労働の削減に努めた。

オ 遵守が必要な制度や関係法令の改定時は職員に周知し、コンプライアンスに努めた。

(2) 他職種やチームで情報伝達と共有を図り、安全、安心なよりよいサービスの提供

ア 認知症ケア委員会を中心に、認知症の特徴やケア方法などのミニ研修を実施した。コロナ禍で研修も制約があったがユニット会議などで対応困難事例の関わり方の振り返り

や検討を行い、各部署のケアに活かした。リビングや居室では他者との対面を避けるなど感染予防に努めながら、「居心地のよい環境づくり」に努めた。

また、家族との面会、交流は感染状況により対面中止としたこともあるが、ガラス越しやズーム、電話連絡、写真付き手紙送付などで対応した。

イ ケアプランは本人、家族の意向や入居前後の生活状況を把握し、自立支援とユニットケア、生活の継続性に視点をおいて、他職種協働で作成、実施した。

また、毎月2回、カンファレンス日を設定し、作成案の事前提出に努めた。併せて作成のスキルアップ研修も2回実施。個別ケアは24時間シートの作成と定期的見直しで本人像を把握し、ケアに活かした。

ウ 感染予防をしながら入居者と厨房職員による年8回のユニットでの食事づくりを実施した。

また、入居者と意見交換をする給食委員会、利用者懇談会、嗜好調査、食事時の厨房職員の巡回などにより「食べるたのしみ」への意見、感想、要望を聞き、食事作りに反映した。

また、食形態は、個別の咀嚼・嚥下機能状態に応じ提供するとともに、小食者等には栄養補助食品なども使用した。また、介護と連携し適温食事に努め、苑の農園で収穫した旬の野菜も提供した。

エ 機能維持は、入居者の意向確認と多職種連携で、心身機能と活動参加の両面から日常で培ってきた能力を活かせる機会を持った（リハビリ体操、絵はがき作り、グランドゴルフ、草取り、散歩など）。

また、訓練室や階段、廊下、ベッド、リビング等を利用して、立位訓練、歩行、姿勢調整、関節可動域、ホットパックなどの生活動作訓練も実施した。

オ 経管栄養者10名、要痰吸引者1名、尿カテーテル使用者1名など医療行為の必要者には医療従事者指示のもと、他職種連携で安全、安心な生活が継続できるよう努めた。

カ 看取り者は5名だった。その人らしい最期となるよう家族や他職種で連携し対応した。

(3) 人材育成

ア 毎月の定例会議で理念や基本方針を確認するとともに、夏期より年間研修計画に基づき各種研修をオンライン等で受講、実施した。

また、苑内研修は多目的ホールを利用して密にならないよう実施した。認知症（苑内のみ4回）、ユニットケア（苑内4回）、リスクマネジメント、看取り、メンタルヘルス（外部講師招聘）、人権（法人内はDVD視聴と県研修参加）、虐待と身体拘束防止研修は第三者委員も参加（2回）を実施した。

階層別研修は、キャリアアップ（チームリーダーコース）研修1名、管理者育成講座（5回）1名が受講。

新任者や転入者は、年間単位のエルダー職員を配置し（計10名）、業務習得とスキルの向上、助言・相談に努めた。

イ 資格取得等は、介護福祉士1名、喀痰吸引研修（実地）3名、ユニットリーダー研修1名（講義・演習リモート）、福祉職員キャリアパス（チームリーダー、1名）管理者研修1名ケアマネ更新研修2名が受講。苑内復命研修は2回実施。認知症の外部研修や介護福祉士実習指導者研修や、民間事業者の実習受け入れはコロナ禍で中止となった。

(4) 地域福祉の推進

ア 居宅介護支援事業は、家族や包括支援センター、各事業所等と連携し、その人らしい暮らしが在宅で継続出来るようプラン作成、介護相談、認定調査等を実施し必要なサービス調整を行った。独居も多く、社会資源活用と民生委員等の地域サポートも重要と感じた。

また、連絡会議やケアマネ研修はオンライン等で参加した。毎年定例の入居者と地域との交流行事は、コロナ禍のため実施を見送った。

イ 短期入所事業は、家族、地域のケアマネージャーと連携し、感染予防対策をしつつスムーズな受け入れにつとめた。また、入院者の空き室を利用し受け入れに努め、家族介護の負担軽減や待機者支援の一助とした。

ウ コロナ禍のため、地域への外出やボランティアとの直接交流は感染予防で控え、リビング内や苑の多目的交流スペース、屋外を利用し、職員と介護予防体操、喫茶、生け花、手仕事、花火、ドライブ、節分、ひな祭りなどの季節の行事を実施した。また、6月には苑の多目的交流ホールで、朝日新聞厚生文化事業団主催のリモートコンサートの鑑賞や湖陵高校生制作の吹奏楽演奏 DVD ビデオレター鑑賞、施設紹介の職員講師派遣なども学校の依頼を受け派遣した。さらに、11月の介護の日には吉岡温泉の配湯やルーテル教会の子供たちから寄せ書きや鳥取東高校生から手作りカレンダーなどの寄贈も受けた。

(5) 働きやすい職場環境作りと安全衛生の充実

ア 簡易リフトの使用や移乗用ボード、スライディングシートなど福祉用具を使用し、職員の腰痛予防と入居者の安全、安心な「抱えない介護」に努めた。また、毎月産業医と衛生委員会を開催し、感染症予防等の情報共有や職員の心身の健康管理の相談、職場環境の点検・改善に努めた。また、オール電化のもと、適切なエアコン活用で、温湿度管理に努めた。

イ 子育て、孫育てなどの為の勤務配慮や、ワークライフバランスを意識した年休、リフレッシュ休暇の取得推進や業務見直しによる時間外勤務の削減などに努めた。

ウ メンタルヘルスケアの推進とハラスメント防止の為に、研修の受講やアンケートを実施し、現状把握や改善に努めた。

4 実習、ボランティアの受入状況

(1) 実習の受入実績

実習受入先	受入期間	実人員	延人員
鳥取社会福祉専門学校	9～10月	1人	21人
鳥取看護大学	12月	5人	5人
計		6人	26人

(2) ボランティアの受入実績

鳥取湖陵高等学校、美萩野1～3丁目老人クラブ、入居者家族（生け花）、鳥取東高等学校、ルーテル教会、吉岡温泉組合配湯、ゆうゆうビジット、よつは（延べ人数 48名）

5 付帯事業

(1) 短期入所事業 定員 併設10名及び空床型

年度	実人員	延人員
令和2年度	58人	3,428人
令和元年度	65人	3,572人

(2) 居宅介護支援事業

年度	実人員	延人員
令和2年度	36人	338人
令和元年度	40人	378人